Osaka Shoin Women's University Repository

『曾禰好忠集全釈』を読む

西端幸雄

『曾禰好忠集』の詳細な注釈書としては、今日、島田良二・神作光一両氏によって著された『曾禰好忠集全釈』（笠間書院刊・昭和五十年・以下、『全釈』と略称）が唯一のものである。そのため、難解な語句や表現が多いと言われている『曾禰好忠集』を読み解こうとすると、この『全釈』に、その拠り所を求めざるを得ないのが現状である。

ところが、この『全釈』をつぶさに読んでみると、随所で首をかしげざるを得ない注釈に出くわすのである。ただ、その点に関して、管見の限り、これまで、どなたも、何も指摘されないままで放置されている。そればかりか、幾人かの方に、その問題点を指摘したところ、まさかという反応が返ってきた。たしかに、この書の著者は、和歌文学の世界では、高名な方々であり、数多くの著書・論文を世に出しておられ、特に、曾禰好忠に関しては、専門家であると言っても過言ではないだろう。そのような方々がまとめられた著書に誤りなどあろうはずがないということかも知れないが、現実には、目を覆うばかりの惨状である。

そこで、筆者は、和歌に関しては、門外漢であるため、出来る限り、国語学の立場に立って、この『全釈』の中に山積する問題点を指摘し、今後、この書を利用するであろう方々に注意を促したい。

では、その問題点とは、いかなるものであるのか、その点を大雑把にまとめてみると、以下の四点に集約できる。

一　文法的解釈の間違い
二　語釈の間違い
三　提示されている用例数の間違い
四　引用論文の取扱方の間違い

注釈書がこうした幾多の問題点を内包しているということは、そ

Osaka Shoin Women's University Repository

れだけで、その注釈に対する信頼性の問題までをも喚起することになり、さらには、著者の、注釈という営為に対する姿勢、著者の、研究者としての資質を問われかねない問題をも提起することになる。いずれにしても、このような幾多の問題点を内包しているということは、この『全釈』を頼りにしては、『曾禰好忠集』を正しく読み解くことなど到底出来ないと断言せざるを得ない。

以下、右に掲げた各項目について、具体的な事例を挙げながら、問題点を指摘することとする。

一　文法的解釈の間違い

ある作品を解釈する際に、語句の解釈の一方法として、文法的な解釈が重要な位置を占める。だから、その文法的な解釈を間違ってしまうと、当然の結果として、その作品の解釈そのものをも間違ってしまうことになってしまう。

『全釈』においては、「語釈」という項目を掲げて、和歌中の語句を詳細に解説しているが、その中における語句の文法的解釈には、あまりにも基本的な解釈の間違いが多すぎる。そして、当然のことながら、当該の和歌の正確な意味が捉えられていない。

まず、その一例を掲げると、

例①　色見んと植ゑしもしるく山吹の思ふさまにも咲ける花かな（七一）

右の歌中の二句目「植ゑしもしるく」について、「語釈」において、次のように解説を施している。

○植ゑしもしるく――えりにえって植えた効果があって、「しも」は七〇番参照。

では、「しも」について参照せよとある七〇番の例は、どのようなものであるか、次に掲げると、

例②　笠なしに花見に来たるけふしもあれ四方の山辺はこぐらかりけり（七〇）

右の歌の「けふしもあれ」という箇所が該当する。そして、その箇所の「語釈」には、次のような解説が施してある。

○けふしもあれ――「しも」は、「この時代には多く、あるものの中でもことに、えりにえっての気持ちをあらわす」（『和泉式部集全釈』）

『和泉式部集全釈』（佐伯梅友氏他）に全面的に頼って、「しも」の解釈を施しているのであるが、七一番歌の「しも」も七〇番歌の「しも」も、副助詞「し」＋係助詞「も」（「し」を間投助詞とする

Osaka Shoin Women's University Repository

意見もある）と、文法的性格が同じあるという考えのもとに、七一番歌の「植ゑしもしるく」についても、「えりにえって植えた効果があって」という解釈に至ったものと予想できる。

しかし、副助詞「し」は、体言や副詞、助詞、活用語の連体形に接続するほか、確かに、活用語の連用形にも接続することはあるが、

・酒にしあるらし（万葉集・三四二）
　助動詞「なり」連用形＋動詞
・寒くしあれば（万葉集・八九二）
　形容詞連用形＋動詞
・病みし渡れば（万葉集・八九七）
　動詞連用形＋動詞連用形
・植ゑし植ゑば（古今集・二六八）
　動詞連用形＋動詞連用形（反復）

といったように、いずれの例の場合も、副助詞「し」に動詞が下接する可能性が高い点と、副助詞「し」を介在させることによって、意味的には、上接語の意味を強めている点で共通している。

ところで、例①の「植ゑしもしるく」は、「しるし（著）」という形容詞が下接している点で、右記の副助詞「し」の特徴は表していないと言える。つまり、この「植ゑしもしるく」の「し」は、強意の副助詞ではなく、過去の助動詞「き」の連体形である。よって、その意味も、単に「植えた甲斐があって」と捉えた方がよいということになる。

次に掲げる例も、単純な文法的解釈の間違いが、語釈の間違いを引き起こしている例である。

例③　隙もなくもの思ひつめる宿なれどするわざなしに
　夏ぞ涼しき（一五二）

右の歌中の二句目「思ひつめる」について、「語釈」において、次のように解説を施している。

○思ひつめる――「思ひつむ」は極度に思い込む意。
　「る」は完了の助動詞「り」の連体形。

「思ひつむ」を「極度に思い込む意」と解釈しているということは、下二段動詞「思ひ詰む」と解釈しているということであろうが、そうすると、「る」は完了の助動詞「り」の連体形」という解説と矛盾することは、明々白々である。完了の助動詞「り」は、四段動詞の命令形（已然形）とサ変動詞の未然形に接続するわけであるから、四段動詞「思ひ積む」と解釈する方が妥当である。そして、この箇所の意味としては、「思いがつのる」とでもした方がよい。

以上のような問題は、基礎的な文法の解説書と古語辞典が手元にあれば、難なく解決できる程度の問題であるはずなのだが。『全釈』

Osaka Shoin Women's University Repository

を通覧していて思うことは、この著者の文法力は、全くお粗末だという点である。助動詞「けり」が歌中に出てくる度に、「けり――気づき。五一番参照」と懇切丁寧に注を施しているのだが、そのような明々白々な点に心を奪われている暇があれば、もっと難解な点を的確に解説するべきではないかと思う。

二　語釈の間違い

ある作品を解釈しようとする際、前項の文法的解釈も重要な点ではあるが、作品中の一語一語の語句の解釈を正確に行わなければ、解釈の結果も当然間違ってしまうことになる。

『全釈』においては、「語釈」という項目を挙げて、和歌中の語句を詳細に解説していることは、すでに述べたが、その「語釈」における語句の解説の中で、信じられない程度の基本的な間違いを犯している。

その一例を示すと、

例④　蛙鳴く井手の若菰刈り干すと束ねもあへず乱れて
　　ぞふる（一一八）

右の歌中の「ふる」について、次のように「語釈」を施している。

○ふる――触れる・さわるの意に、旧るの意を掛ける。

さらに、この「語釈」を元に、次のように「大意」を示している。

○井手の若菰をすっかり刈り尽くそうと、たばね終らない中にやたらに若菰に手をふれる、そのように、髪をたばねもあえず心乱れて年をとることだ。

「語釈」の間違いを指摘する前に、この「大意」を読むだけで、訳が分からなくなる。「若菰をすっかり刈り尽くそうと、たばね終らない中にやたらに若菰に手をふれる」とあるが、「すっかり刈り尽くそう」とすれば、「若菰に手をふれる」というのは当たり前の動作ではないだろうか。右の歌は、このような単純なことを詠んでいるのだろうか。さらに、「たばね終らない中にやたらに若菰に手をふれる」ように「髪をたばねもあえず心乱れて年をとることだ」という結び付きは、なんとも不自然ではないだろうか。また、「髪」という意味が、右の歌のどの表現から喚起されるというのであろうか。

ところが、この分かりにくい「大意」をもとに、「評」においては、次のように解説を施している。

○女性の立場になって詠んだものと思われる。すなわち、表面の若菰刈りの意の背後に、女の悩み乱れて暮らす中に、いつのまにか年を経た心境をそえたものであろう。小野小町の〈花の色は移りにけりないたづらにわ

Osaka Shoin Women's University Repository

が身世にふるながめせしまに〉を思い出させる。

（一一六ページ）

しかし、なぜ、右の歌が「女性の立場になって詠んだもの」と短絡的に捉えることができるのであろうか。「乱る」という語に引かれたのか、または、無理矢理引き出してきた「髪をたばねもあえず」という自己流解釈から導き出してきたのであろうか。ましてや、この一一八番歌が小野小町の歌を思い起こさせるというのは、あまりにも突飛な考え方ではないだろうか。いずれにしても、分からないことばかりである。

実は、このような「大意」や「評」の分かりにくさは、右に掲げた「語釈」の間違いによって生じたものである。「語釈」において、「ふる」を「触れる・さわるの意に、旧るの意を掛ける」という意味だとしているが、「触れる・さわるの意」の「ふる（触）」は、平安時代においては、一般的に下二段活用であり、「旧るの意」の「ふる（旧）」は、上二段活用である。ところが、一一八番歌の「ふる」の直前には、係助詞「ぞ」がある。ということは、この「ふる」は、連体形ということになり、下二段動詞の「ふる（触）」でも、上二段動詞の「ふる（旧）」でもなくなってしまう。そうなると、「評」において、解説されていたような「女性の立場になって詠んだもの」ではなくなり、小野小町の歌を思い起こすことすら無理ということになる。

では、この場合の「ふる」をどのように解釈すればよいかという

と、掛詞にはなっていない、四段動詞「降る」と解してよいのではないかと思われる。そして、歌意は、「束ね終わらないうちに若菰が手の中から乱れ落ちてしまう」とでもすればいかがであろうか。

三　提示されている用例数の間違い

『全釈』の「語釈」や「評」の中で、類例の用例や用例数を提示していることがあるが、特に、用例数については、全く信用できないほどに、数が間違っている。『全釈』の一四一ページには、島田・神作両氏が、和歌の用例を検索される際には、『正続国歌大観』を利用されたことを類推できる記述がある。しかし、もし、この記述が事実であるのなら、起こり得ないほどの間違いが、なぜ起こったのだろうか、全く不可解としか言いようがない。

今、その一例を掲げると、一四七番歌の「評」において、次のように、「にはたづみ」の『万葉集』における用例数を提示している。

○「庭潦」を枕詞として用いたのは、万葉集巻十九〈庭潦流るる涙とどめかねつも〉の外、万葉集四一六〇、四二一四に用例があり（後略）

この表記の仕方からすれば、『万葉集』には、「にはたづみ」を枕詞として用いた用例が計三例あるというように理解できるのである。

この用例数の捉え方の元となったのは、この「評」の前の「語釈」

Osaka Shoin Women's University Repository

において、

○庭潦――雨が降ってにわかに庭にたまった水。流れるにかかる枕詞。（後略）

と説明している点であると推測できる。

ところが、現行の古語辞典を見ても、この「にはたづみ」は、「流る」の他に、「行く」「川」にかかるとしているものが一般的である。ということで、『万葉集』における「にはたづみ」の用例を見ると、左に掲げるように、計六例が存することになる。

・みたたしのしまをみるときにはたづみながるるなみたとめぞかねつる（万葉集・巻二・一七八）

・はなはだもふらぬあめゆゑにはたづみいたくなゆきそひとのしるべく（万葉集・巻七・一三七〇）

・たまほこのみちゆくひとはあしひきのやまゆきのゆきにはたづみかはゆきわたり（万葉集・巻十三・三三三五）

・たまほこのみちにいでたちあしひきののゆきやまゆきにはたづみかはゆきわたり（万葉集・巻十三・三三三九）

・ゆくみづのとまらぬごとくつねもなくうつろふみればにはたづみながるるなみだとどめかねつも（万葉集・巻十九・四一六〇）

・あづさゆみつまびくよおとのとほおとにもきけばかなしみにはたづみながるるなみだとどめかねつも（万葉集・巻十九・四一六〇）

ただ、「にはたづみ」が、「流る」以外にはかからないという議論も起こるかもしれないので、その点を留保したとしても、この「評」の解説には、信じられない程度の間違いが存在する。

それは、右の『万葉集』の例からも分かるように、〈庭潦流るる涙とどめかねつも〉という表現を持っている万葉歌は、巻十九の四一六〇と四二一四の二首の長歌しかないのである。ということは、先に掲げた、『全釈』の「万葉集巻十九〈庭潦流るる涙とどめかねつも〉の外、万葉集四一六〇、四二一四に用例があり」という解説は、なんともトンチンカンな間違いを犯しているということになる。

このような間違いを犯していることから推測して、この「評」の解説を書くにあたり、この著者は、『万葉集』を再点検していないことは、明かである。ということは、突き詰めれば、この書の著者の、注釈書を著すにあたっての姿勢が、実にいい加減なものであったと言っても過言ではないだろう。

四　引用論文の取扱方の間違い

『全釈』全体を見通すと、その依拠した主たる文献がきわめて限

Osaka Shoin Women's University Repository

定的であることが分かる。江戸時代に成った『標注曾丹集』、その他、『平安和歌歌枕地名索引』、佐伯梅友氏他の『和泉式部集全釈』、滝沢貞夫氏の『曾禰好忠試論』（言語と文芸・昭和四三・七）、木越隆氏の『曾丹集の表現―集中歌の解釈をめぐって―』（言語と文芸・昭和四九・五）、蔵中スミ氏の『曾丹集』に関する一連の論考などがその主なものであると言っても過言ではない。

ただ、ここで、問題とするのは、注釈書を成すのに、依拠した文献が少ない点ではない。その文献の利用の仕方の問題である。

『全釈』の「語釈」において、滝沢貞夫氏の論文を頻繁に利用している。しかし、引用する際に、滝沢氏の論考の意図するところを十分に理解していないのではないかと思われる節がある。さらに、滝沢氏の論考に明かな間違いがある点をも、そのまま転写しているという場合まである。

こうした、依拠した文献に対して、何の批判も施さないままに引用するという姿勢は、「孫引き」と非難されてもいたしかたないのではないだろうか。

まず、滝沢氏の論考を引用する姿勢に対して疑義を提示したい。『全釈』の「語釈」において、随所に、次のような解説が施してある。

○万葉、古今、後撰に見えない。当時の散文語か（滝沢貞夫氏「言語と文芸」昭和四三・七）

当該語句が散文語である可能性を解説しているわけであるが、この解説の元になった滝沢氏の論考は、左記の通りである。

万葉集・古今集・後撰集に用例がない「曾丹集」中の語彙について、蜻蛉日記・源氏物語・紫式部日記・手製の枕冊子の索引の全てに用例が認められる語彙を便宜散文語と見なして（後略）〈十三ページ〉

つまり、滝沢氏は、「蜻蛉日記・源氏物語・紫式部日記・枕冊子」の四作品というきわめて限定した範囲を調査された結果として、「便宜散文語」と名付けて、「散文語らしき」（滝沢論文十三ページ）ものを提示されているに過ぎないのである。だから、それを受けて、『全釈』の「語釈」において、当該語句を「当時の散文語か」と解説するのは、きわめて危険な営為と言えよう。この解説に依れば、滝沢氏の論調よりも「散文語」である可能性の高さを説明してしまっており、『全釈』を利用する者を間違った方向に導いてしまう危険性があると言えよう。

ただ、問題は、これだけにとどまらないのである。先にも記したが、滝沢氏の論考中の明かな間違いをも、無批判にそのまま転写しているのである。

その好例を示すと、

○扇――万葉、古今、後撰に見えない。当時の散文語か

Osaka Shoin Women's University Repository

（滝沢貞夫氏「言語と文芸」昭和四三・七）

という例が挙げられよう。この解説の源は、右に引用した滝沢氏の論考の十三ページにある。その箇所で、滝沢氏は、「万葉集・古今集・後撰集に用例がなく」「蜻蛉日記・源氏物語・紫式部日記・手製の枕冊子の索引の全てに用例が認められる」「便宜散文語」として、『毎月集』中から、「扇」を始め、二十七語を提示しておられるのであるが、この「扇」が「万葉集・古今集・後撰集に用例がない」とする滝沢氏の意見は、明らかに間違いである。

今、平安和歌に「扇」の用例を求めるなら、早い時期の例として、次のような用例が求められる。

・沢に住むたづのは風に涼しきは君が千とせにあふぎなるべし（円融院歌合・二）
・わかれぢにへだつるくものためにこそあふぎのかぜはやらまほしけれ（能宣・三九）
・すみぞめのあふぎのかぜは秋よりもこころすごきはきまさりける（安法法師・四二）
・そへてやるあふぎのかぜしこころあらばわがおもふひとのてをなはなれそ
（後撰集・巻十九・離別羈旅・一三三一）

このように、『後撰集』に用例があり、さらに、好忠よりも早い時期の歌人が、すでに「扇」を使用していることから、この「扇」は、まず、滝沢氏が言う「便宜散文語」ではないと言える。さらに、その滝沢氏の論考を引用した『全釈』の姿勢は、自身の手で再検証するという労を惜しんで、無批判に滝沢氏の論考を孫引きしたという、研究者として、最も恥じるべき愚行を犯したことになる。

五　その他の問題

以上に掲げた問題点だけでも、『全釈』の価値を云々するに余りあるかと思うが、本項において、もう一点、指摘しておきたいことがある。

その点、無礼を顧みず、敢えて表現するなら、冒頭にも記したことであるが、この書の著者は、たしかに、和歌文学の世界では、高名な方々ではあるのだが、『全釈』を通覧していると、本当に和歌をお読みになっているのか、本当に和歌のことがお分かりなのかと、素人ながら疑いたくなってしまうほどに、不自然な、不思議な解説に出会うことがある。

その典型は、「万葉的」「万葉の影響」「古今的」「古今の影響」という用語の使い方である。

そこで、「古今的」という用語の使い方をまず問題とする。

例⑤　名にし負へば頼まれぞするわが恋ふる人にあふちの花咲きにけり（一二八）

Osaka Shoin Women's University Repository

右の一二八番歌の「評」には、次のような解説が施してある。

○「楝」を「逢ふ」にかけて詠んだ点は古今的表現であるが（後略）

まず、この解説の言わんとするところが、もう一つ不鮮明である。

A　掛詞を駆使した点が古今的表現なのか

B　「楝」を「逢ふ」にかけて詠んだ点が古今的表現なのか

今、Aを意図しているとすると、『万葉集』をはじめとする他の和歌集において、掛詞という修辞法が用いられていないということを意味してしまう。しかし、これは、現実にはありえないことであるから、この点は意味をなさない。また、Bを意図しているとすると、『古今集』には、「あふち（楝）」の用例自体がなく、それに対して、次に掲げるように、『万葉集』には、「楝」を「逢ふ」にかけて詠んだ」歌が存在するから、この点も、また意味をなさなくなる。

・わぎもこにあふちのはなはちりすぎずいまさけるごとありこせぬかも（万葉集・一九七三）

右に記した点からすると、一二八番歌の「楝」を「逢ふ」にかけて詠んだ点は、万葉的表現」とする方が妥当ということになってしまう。

いずれにしても、この書の著者は、「古今的」「万葉的」という用語を、その本質的な意味を弁えることなく、きわめて安易に、単純に用いていると言える。

また、次に掲げるような、「万葉の影響」云々と解説を施してある箇所も、まず、疑ってかかった方がよさそうである。

例⑥　蕨生ふる矢田の広野にうち群れて折り暮らしつつ帰る里人（六五）

この六五番歌に対して、「評」で、

○「蕨」を歌語として用いたのは、万葉の影響と思われる。

と解説している。今、この解説に従えば、好忠は、「蕨」という語を『万葉集』の影響を受けて詠み込んだということになる。ところが、『万葉集』に「蕨」の用例を求めてみると、「さわらび（早蕨）」〈一四一八〉は存在するが、「わらび（蕨）」単独例は存在しないのである。

さらに、次の問題として、『全釈』の「評」において、歌人とし

Osaka Shoin Women's University Repository

ての好忠を、さまざまな表現を用いて評価しているのであるが、その評価の中には、この書の著者は、本当に和歌の研究者なのかと疑いたくなるようなものがある。

今、その一例を示すと、

例⑦　小山田の水絶えせしより天にます岩間の神を祈がぬ日ぞなき（一四五）

右の歌を評して、次のように解説している。

○好忠の農業生活者の立場になって詠んだ歌であり、他に類を見ない。

しかし、「他に類を見ない」ということは、言い替えれば、好忠以外、「農業生活者の立場になって歌を詠んだ」歌人はいないということになる。

同様の例を、もう一例示すと、

例⑧　御田屋守今日は五月になりにけり急げや早苗老いもこそすれ（一二五）

右の歌に対して、「評」において、次のように解説している。

○好忠が農業に従事している者に身をおいて詠んだ歌であり、前の一〇〇番の歌をうけている。こういう歌は、古今集時代から宮廷社会を背景として詠まれた歌人の間では忘れられた世界であり、古今・秋上〈昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋の風吹く〉の読人しらず時代の歌つまり農業を営む生活の中から生まれた歌が再び好忠によって詠み上げられたのである。後拾遺・夏〈さみだれに日も暮れぬめり道遠み山田の早苗とりも果てぬに〉（藤原隆資）のように、以後多く詠まれるようになる。

右の解説は、先の一四五番歌の解説における論調より若干弱くはなっているものの、言わんとしているところは同じである。つまり、「農業に従事している者に身をおいて詠んだ歌」は、古今集時代にはなく、「再び好忠によって詠み上げられ」、後の『後拾遺集』の時代あたりに引き継がれたということであろう。

しかし、このような断定的な解説を施す場合、相当広範囲に、徹底的に「農業生活者の立場になって詠んだ歌」、「農業に従事している者に身をおいて詠んだ歌」を検証しなければならないのだが、どうも、この著者は、その労を惜しんだのではないかと思われる。

では、実際に「農業生活者の立場になって歌を詠んだ歌」「農業に従事している者に身をおいて詠んだ歌」は、『古今集』の時代にはなく、『後拾遺集』の時代あたりまで下らなければ、出現しない

Osaka Shoin Women's University Repository

のだろうか。今、手近な『新編国歌大観』によって調べると、左に掲げたような歌を見つけることができる。

・み山田のおくてのいねをかりつみてまもるかりほにいくよねぬらむ（躬恒集・一三九）
・冬みれば水もまかせぬ小山田にいつすき返し種をまきけん（四季恋三首歌合・二一）
・うゑぬよりもるめるものをやまだはなはしろみづにまかせたらなむ（弘徽殿女御歌合・一六）
・ほどもなくしげきうゑ田の早苗かなまじるくさばのとりあへぬまで（源大納言家歌合・一一）

右に掲げたように、明らかに「農業生活者の立場になって詠んだ」歌が、好忠の時代の前後に、他にも存在するのである。つまり、一二五・一四五番歌の「評」は、十分な検証を怠り、自分の頭の中にある固定的な好忠像（六位の卑官・丹後掾・田園生活・農業生活者の立場に立つ）を、無反省に、単純に適用しただけであると言えよう。

以上の点から明らかになった点は、『全釈』の著者は、この書を成すにあたり、細心の注意を払って、ひとつひとつの問題点を検証していないという点と、敢えて言えば、和歌について、本質的なことが何も分かっていないという点である。

六　最後に

これまで、『全釈』に見られる問題点の一部を、紙幅の許す範囲で指摘してきたわけであるが、重箱の隅をつついたという批判を敢えて甘受するつもりで、本稿を成した。その理由は、二つある。一つは、それぞれの問題点のすべてが、熟考を重ねなければならないような難解な箇所に出現するのではなく、きわめて基礎的な程度の箇所に出現しているからである。このような明々白々な箇所で間違いを犯すということは、冒頭にも述べたことではあるが、著者の、注釈という営為に対する姿勢、さらには、著者の、研究者としての資質を敢えて問わざるを得ないという点である。また、二つ目は、冒頭にも記したが、今日、『曾禰好忠集』の詳細な注釈は、この『全釈』が唯一のものといってもよい。そのため、難解な歌が多いとされる『曾禰好忠集』を読もうとすると、ついこの『全釈』に頼らざるを得ないのが現状である。しかし、その書が、とんでもない間違いを犯しているということは、あまり知られていないで、かえって積極的に利用されているという点が、その理由である。

いずれにしても、このような間違いが山積しているということは、この書を頼りに『曾禰好忠集』を正しく読み解くことは出来ないと断言してよいだろう。注釈書とは、本来、注釈の対象とした作品の読解を深める助けとなるものであるはずで、読解の妨げ、誤解の助けとなってはいけないものである。しかし、残念ながら、筆者の見解としては、本稿に取り上げた『全釈』は、読解の妨げ、誤解の助

Osaka Shoin Women's University Repository

けにはなったとしても、正しい読解の助けには絶対にならない「誤注釈書」というレッテルを張らざるを得ない代物である。

もし、この『全釈』の存在が、新たな『曾禰好忠集』の注釈書の出現を妨げているのなら、一日も早く、この『全釈』を廃本にし、これを克服した、質の高い『曾禰好忠集』の注釈書が世に出ることを切望している。

なお、最後に、本稿は、『全釈』に対する批判を通して、『曾禰好忠集』の正しい解釈を行おうと、毎月一回、催している勉強会「あらたまの会」（西端幸雄・木村雅則・川畑智美・志甫由紀恵・稲田年美・加藤妙子・小路真由美・村上実和子）での勉強の成果であることを断っておく。